

くにたち しうべ



NO. 17

発行日 2012 年 11 月 1 日
編集=くにたち図書館地域資料ボランティア
発行=くにたち中央図書館

テーマ

『くにたちの地名』シリーズ7:道・坂編

1. 国立の道概略位置

この地域での暮らしや道は、鎌倉時代から江戸時代、近代の変革を経て、さらに多摩川の氾濫などのたびに大きく変化してきました。近年では谷保村北部地域の雑木林が開発された大正15（1926）年、富士見台団地建設の昭和40（1965）年代、さらに中央自動車道、日野バイパス開通など南部地域も大きく変わりました。



図 1-1 国立の道・坂概略位置

図1-2 字・道名 (*2 国立市史・中巻付録図3より作成)

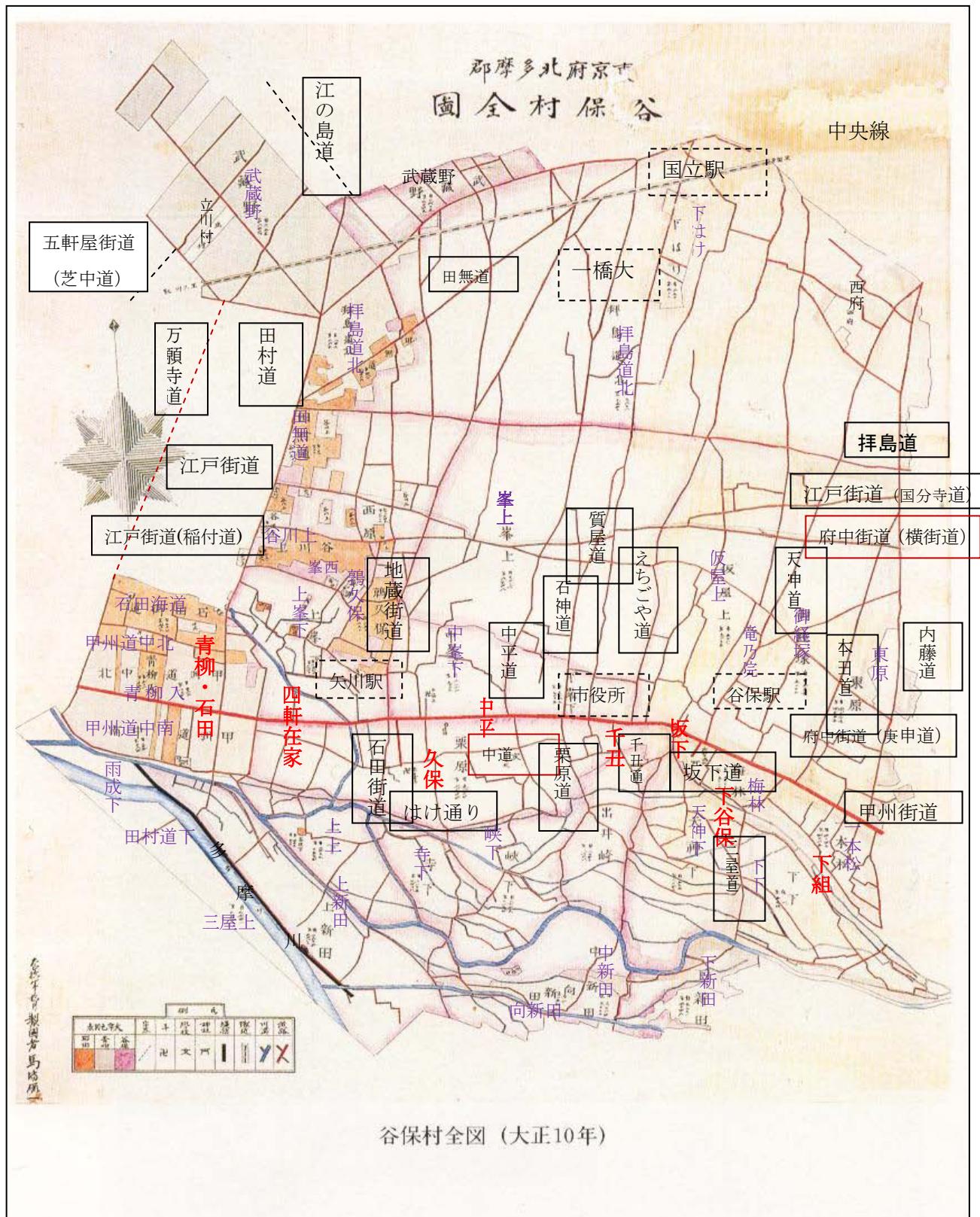


図1-3 甲州道中年代別変遷表

甲州道中年代別変遷表 甲州街道の変遷と多摩川の変遷 (府中一国立一日野) (*54 国立まなびあるきの会 小泉智男 作成)

| 年代 | 甲州道中 | 多摩川の表し | 地元の構造事項と幕府と時代体制 |
|-----------------------|---|--|--|
| 貞和元年(1181) | | | 谷保天満宮、天神島より現在地に遷座 |
| 元弘3年(1333) | | | 新田義貞の攻め、分倍河原合戦 |
| 天正10年(1582) | | | 徳川家康江戸入府 |
| 文永3年(康永元年)(1396) | | | 多摩川疏浚実施、青柳島が誕生 |
| 慶長3年(1608) | | | 家康、征夷大将军・江戸開府 |
| 慶長9年(1604) | 日甲州道・隅設 一里塚設置 | (本音の表し) 本音一里塚(りゆうか)、 慶長9~10年(1603~04)~勅願初附 (1609~10) (石田の表し) 三 家一石田 | 日甲州道・1初附甲州道・日本橋・ 甲府隅設 日本橋起点に東海・中山・北陸道に 一里塚設置。全国に普及 常久(里)・本音(6里)・萬葉寺(9里) ・日野谷(10里)の一里塚 |
| | | [日甲州道10のコース] 布田宿・日甲州街道・飛田捨から・足川街道・常久一里塚 普門寺前・京所道・大國魂神社(道御門前)・善明寺前からハケ下へ・分母殿在所・光明院 御御場道・本音一里塚(1里)・(本音表し)・市街道(日新通り)・(一本柳原)・三家 ・石田の表し・石田村・万葉寺一里塚・日野青葉の地蔵・日野音・西の地蔵・大坂 現甲州街道・日野谷一里塚 | |
| | | *本音の表しは玉川変更以前のルートであり、慶長年間甲州道が隅設以前の表しのはずである。存在も虚構されていない ので、通者のコースは三家~徳田の表しであろう。 | |
| | | 甲州街道の名は明治以降現在が指定されるようになってから付けられ、最初は甲州道中と呼び、正保6年(1716)甲州道中と改称した。 | |
| 慶長16年(1610) | 甲府~下横筋延長 | | |
| 寛安年間(1648~62) | 日甲州道の表し(石田から移動)~貞享元年(1684)まで30年 る道筋に変更 | 万葉寺の表し(石田から移動)~貞享元年(1684)まで30年 る道筋に変更 | 万葉寺の表し(石田から移動)~貞享元年(1684)まで30年 る道筋に変更 |
| | | [日甲州道2のコース] 本音の一里塚以降・ハケ線下(一部上り)・谷保天満宮向日門前 ・南越原を青柳・日野坂・萬葉寺表し・日野音 | |
| 承応2年(1653)・万治2年(1659) | | | 多摩川大水・青柳島消失 |
| 寛文年間(1661~73) | 甲州街道(街道移動) | 万葉寺表しのまま | [街道移動]・ 現コースに近いコースに移動・ 年代は確定できない |
| 寛文11年(1671) | [街道移動後] | | 青柳村移転(流失後40村に散住まい)、 現国立(ハ)街道移動後 |
| 貞享元年(1684) | 甲州街道さらにも移動 | 日野の表し(大正11年日野橋架橋まで) | |
| 貞享年間(1684~61) | 日甲州街道 | | |
| | | [日甲州街道のコース]・既成現在の甲州街道の位置(ただし日野音ではなく日野青葉差点・奥多摩街道・栄橋体験館・ 多摩川土手・日野の表し・現モノレール下・東の地蔵・日野音 | |
| 大正16年(1927) | | 日野橋架橋・日野の表しルートの変更(甲州街道現在ルートになる) | |

2. 道

国立には西から東に、三本の崖線（ハケ）が走り、間に二つの段丘、多摩川沖積地と続きます。青柳段丘上は甲州街道が、立川段丘上は拝島道・田無道・江戸街道・府中街道が、それぞれ東西に通っていました。それらの道を南北につないでいるのは、田村道・地蔵街道・中平道・質屋道・えちご道（えちごや道）・坂下道・天神道・本田道です。そのほか、甲州街道から南へは、石田街道・石神道・千丑通・三屋道（別名：オタキ道か）が延びていました。江戸時代の半ば以降は、これらの道が、国立の地の骨格をなしていたといえます。（*2、国立市史・中巻,P647～649）

道名は、江戸や府中など行き先で呼んだり、ある区域のみで使われるなどいくつかの呼び名があります。街道^{#37}、海道^{#38}、道^{#40}、通^{#41}も時代でかわり、適宜呼称していたようです。

2-1 江戸時代からの古道^{#35}

1) 甲州街道

江戸を起点とした五街道^{#34}の一つで、江戸を出て、甲州にいたり、さらに下諏訪において、中山道と合流します。正式名称は、正徳6（1716）年までは、「甲州海道^{#38}」それ以降は「甲州道中」となっています。一般には甲州街道という言い方が使われています。街筋には、八王子千人同心や甲府勤番がおかげ、当初は軍事目的の強い街道でした。（*くにたちのくらしと交通）

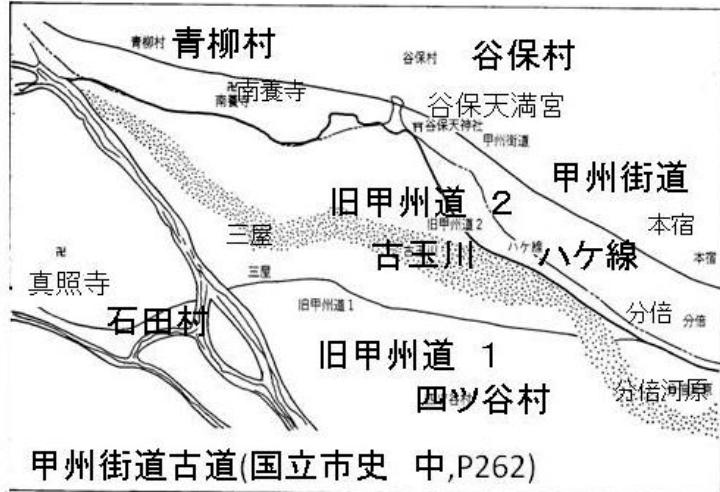


図 2-1 甲州街道古道（*2 国立市史,中巻,P262 より）

徳川幕府の全国的な交通運輸制度として、慶長6（1601）年以降、五街道など、順次整されていきましたが、その創設について、確定出来る資料はありません。（*42,Vol194,P8,10）

古道^{#35}は青柳崖線から谷保田圃を通り、府中の本宿田圃の中央を抜け府中宿に向かう街道でした。

『武藏名勝図会』によれば「甲州街道いまの筋へ改まりときに」と書かれ、

古道の一里塚が描かれています。一里塚がつくられたころの甲州街道が、いっごろ今の場所に移ったかは、はっきり分かっていません。江戸時代が整備した街道^{#37}もはじめの頃は古道のように細々と続く道だったのでしょう。

慶長9(1604)年頃大久保長安の手で、整備されたとも伝えられます。参勤交代に利用した大名は3藩と五街道では最も少ないので、京都から将軍へ新茶を献納する“お茶壺道中”などにも利用されました。(*62)

現在甲州街道は、国立地域内ではほぼ江戸時代のころと同じ青柳段丘の上を通っていますが、以前は滝乃川学園の中を抜け谷保天満宮の西から南へと、段丘の縁辺を通っていました。谷保天満宮が現在の地に遷された時は、その古甲州道と呼ばれる古道の正面に向かい建てられました。(*42, Vol155, P9) ところが江戸時代初期に天満宮の後ろを通る現在の場所に新道が作られ、それが甲州街道となりました。

17世紀はじめの甲州街道は、図2-1の旧甲州街道2のような位置にあります。下谷保南部ハケ下から天満宮の前で田圃におり、再び北上して千丑裏から栗原ムラを通り西下して、青柳南部の「貝殻坂」を立川柴崎方面に抜けていました。道路変更は万治2(1659)年以前と推定されます。これが度重なる多摩川の洪水もあって貞享元(1684)年の改修で北に移され、府中六所宮一本宿一谷保一立川柴崎のルートとなり、国立地域内では、青柳段丘の上に移されたと伝えられています。(*2, 中巻・P262)

昭和6, 7年にかけて、道幅の拡張し7間通りとなりカーブする坂を緩やかにしました。(*20-1, P174)

前章1-3に 甲州道中時代別変遷をまとめましたので、参照して下さい。

2) 江戸街道

江戸街道は各地から江戸へ向かう道筋に付けられた名前です。

昭和初期に耕地整理により都市基盤整備された東・中・西地域と昭和30年代後半に土地区画整理により都市基盤整備された富士見台地域との間に位置しています。(*25)

庚申塚(西3-6-3)の祠の前の道路は、昔の江戸街道で、今はまっすぐ東西に伸びており、西はそのまま市立第二中学校北側を経て矢川通りまで続いていますが、祠より西の区間は区画整理で作られた新しい道です。祠の西側に南北に走る細い道が江戸街道の続きで、40mほど北上して北西へ曲がり、矢川通りと交又しながら立川方面へと続いて、その区間も江戸街道と呼ばっていました。(*41-4 長沢利明、くにたち郷土文化館研究紀要 N05・P15)



図2-2 庚申塚(江戸街道)

(古者の語り)

江戸街道は府中街道と五商を過ぎた所で重なって、庚申様の所から立川の方へ一直線に行きます。

東は三小の南側の道から府中の七小の北側をまっすぐ東へ行き、西府のおくまん様（熊野神社）の裏側を曲がって行くと、馬場大門の古いけやきがあって、菓子屋の青木屋の所へ抜けました。

その東はまっすぐ多摩墓地の中を通り、府中の八幡宿から人見を通り、飛行場の北側から大沢の坂を上り、三鷹の天文台の北側を通って新川に抜けます。（*20-1・P59）

3) 府中街道（庚申道・横街道）

府中街道と名の付いた街道は2本あり、一つは江戸街道が峰上で分岐し府中へ向かう庚申道（前項2）とさらに東進して仮屋上で分岐する道で横街道と言われました。いずれも国立市内は、痕跡がわずかですが、府中市は現存しています。

庚申道の名は、内藤道との分岐点にある庚申塔に由来します。この道は他にも「わらつけ道」「いな道」などの名があります。（*52）

*「わらつけ道」は、養蚕のためのわらを買って、その荷を馬につけて帰った道からこの名があります。「いな道」は信州の伊奈へ行く道とも、あきる野市の伊奈（石材産地）への道筋であるかもしれません。

横街道は、この道が甲州街道と平行して東西を横断することに由来します。この道の北側は尾張徳川家の御鷹場になったところです。（*52）

(古者の語り)

府中街道は江戸街道と少し重なりますが、畠一枚まわって、郵政の土手の所から畠の所を通って立川の東の踏切にでます。反対側の方はまっすぐ行くと国立七小の向こう側の道に抜けます。

（*20-1・P59）

*府中街道は、江戸時代に整備された街道で、川崎駅東口の市役所通り交点（神奈川県川崎市川崎区）終点：所沢駅。あるいは、所沢駅直前の、久米川町交差点（東京都東村山市）とする。古者が語っている府中街道は、府中へ行く道をさしているものとして、呼んでいたと思われます。（編集者注）

4) 拝島道（拜島街道）

この道が拜島へ行く道だったことを示します。国立市内は痕跡がありませんが、立川市、府中市に残っています。拜島においては江戸街道と呼ばれていました。



図 2-3 府中街道

(古老人語り)

三小の東の変電所の所から、ずっとまっすぐ山林の中を通って、立川の東の踏切へ出ます。そこを通り越して立川駅の北側をどんどん西へいって、
ふくしま (昭島市) に抜け、まっすぐ行って拝島へ抜けます。(*20-1・P59)

5) 田村道 (田村海道)

立川柴崎村と青柳村との境にあり、現在の東京女子体育大学の西側の細い道です。村境を南北に通じていました。(*29・P243)

多摩川の万願寺の渡し (大正末期まで運行) を通って日野市石田に通じていました。

上谷川の北部に田村道の字が、また多摩川べりに、雨成下に続いて、田村道下の字名が残っています。

田村道とは日野市万願寺の小字名で田中田村の田村と言われ、万願寺、下田あたりからの出作りが多かった関係で名付けられています。(*田村 日野市万願寺・下田一帯の古くからの通称地名。かつて北条氏政の侍医であった田村安柄 (安清) の屋敷が現在の安養寺 (万願寺 4 丁目) 付近にあったとされ、これが上田村 (かみだむら)。下田村 (後の字上田・下田) に分かれたとする説もある。(*22))

6) 田無道 (田無海道)

立川柴崎から西国立駅の南側の踏切を抜け、谷保やまを通って、田無宿に通じていた道。現富士見通り側にほぼ同じ角度にありました。現在は道の痕跡はありませんが、国立東から国分寺市役所通りとして残っています。江戸時代田無宿は、青梅街道の宿場としてかなりにぎわっていました。(*29・P224)

7) 地蔵街道

甲州街道から南武線矢川駅に通じる道路の俗称。

慶安年間 (1648～1652年) 中に、道路開通記念として、街道入口に地蔵尊が建立され、以降地蔵街道と呼ばれるようになりました。現在この地蔵尊は、南養寺に移されています。

地蔵街道東北地方に「御鷹塚」という塚がありましたが、いまはありません。徳川幕府の頃、尾張大納言のあとだったと伝えられています。「御鷹塚」は、峯上にもありました。

8) 石田街道

地蔵街道の反対側の国道・甲州街道から南方に向かって走る道路の俗称。昔は、本町から「万願寺の渡し」 (谷保の渡し) をへて日野市石田 (万願寺) に通じる主要路でした。万願寺の渡しは、慶安年間(1648～1652)に開設されたといわれ、それ以前はこれより下流の「石田の渡し」 (府中市三屋一日野市石田) が使われていました。

当初段丘下を通っていた「甲州街道」が、貞享元（1684）年の改修により現在の甲州街道に近いものになり、渡しも上流の「日野の渡し」が使われるようになりました。その後、万願寺の渡しは、大正15（1926）年に日野橋ができたことにより廃止されました。（*6）

9) 国寺街道（国分寺街道）

天満宮から国分寺へ向かう道で、府中街道（横街道）と分岐する江戸街道で同一を称したようです。

（古者の語り）

国分寺街道のことで、消防署の向こうの森久保という酒屋から斜めに天神様の所に入りましたが、いまは団地（富士見台第一団地）ができてなくなりました。東の方は江戸街道と東芝の所で一緒になり西府にぬけ、東芝の北側を斜めに切れて警察病院の前に斜めに出て、そこから薬師様の前に抜けてずっと国分寺の本村へ入ります。（*20-1・P59）

おおむね 大国魂神社 前から国分寺駅前までで、府中市内の道を、櫻通りといいます。

10) 万願寺道

みのわ通りの西側を南北に通ります。貝殻坂橋から北上し立川・国立境を走り、西国立駅南から正樂院西を抜け北緑地に至る。谷保弁財天近くの市境には庚申塔が建てられています。

11) 内藤道（下村道）

甲州街道を北へ折れ、旧谷保村字下組邑から国分寺の内藤新田へ行く道。（*29-2,41-1）

12) ハケの道（はけの道）

青柳段丘沿いにのびるハケの道は、緑多く、段丘上、段丘下とともに散策しやすいコースとなっています。（*39,Vol8）

2－2 大正10年に見られる谷保村中心部の古道

大学町開発と、その後の富士見台団地の開発で、JR 南武線以北の道は大きく整理されました。南部では現存も一部名残をとどめています。南養寺・谷保天満宮を中心とした、大正10年の谷保村全図の一部から抜き出しました。（*20-3）

1) 質屋道



図 2-4 国分寺道

市役所前の南武線昇松踏切を南下する道と思われます。市役所北には痕跡はありません。(*20-3 P87)

2) えちごや道

仮屋上と峰上・下峰下との境となります

3) 坂下道（さかしたみち）

坂下と滝の院・梅林の境目にあり、谷保天満宮の横を通り天神橋を通つて、出井崎と天神下の境をなし、谷保田圃に向かいます

4) 石神道（しゃくじみち）

石神と千丑の境（一部は屋敷分で入り組んでいました）をなしていました。市役所前踏切から南下し、甲州街道から谷保浄水所へ向かう道です。甲州街道南部へに入るみちは栗原道とも呼ばれています。

5) 千丑道（ちうしみち）

千丑と坂下の境。南武線昇松踏切と坂下第二踏切の中間を南下する道です。甲州街道から出井橋へとつながります。まきや道ともいわれていたようです。

6) 天神通（てんじんとおり）

滝之院と御経塚の境にあり、谷保天満宮に行く道です。

7) 本田道（ほんだみち）

甲州街道本田家から北上し、御経塚と東之原の境にあります。7小際の角にあった庚申塚は下谷保防災センターに移されました。「さんや通り」とも呼ばれたようで、甲州街道に並行の四谷道には「さんや」の地名が残ります。甲州街道で途切れていますが、南下すると府中の三屋通りにつながる道筋であります。

8) 四ッ谷道

本田道の東、甲州街道に並行して、四谷（現府中市、現明治22年西府村に合併）に向かう道です。

9) さんや道

甲州街道の南側で三屋（現府中市四谷村）へゆく道

10) 中道

国立一小北側の道で、栗原道から西に南養寺に通じる道。

12) 栗原道

石神道の甲州街道南側を通る道を呼んでいます。谷保村の中心。

13) 中平道

中平と石神の境界を通る道で、一小の前から神明社横・古民家横を通り南部田圃へと通り抜けます。



図 2-5 南養寺・天満宮近辺の道

14) ヲタキ道

甲州街道本田道を西方に筋違いに南部に
おりる道。

四ッ谷に向かっています。名前の由来
は不明です。

2-3 大学町増設時にできた道



図 2-6 川原新田損地御取調観絵図より一部(*53 遠藤仁家文書)

1) 大学通り

国立駅南口ロータリーから、真っ直ぐ

南へ江戸街道（国立高校の南）まで、約 1.2km の長さがあり、通りの幅は 24 間（約 43.6m）です。箱根土地（株）は、商大を記念して「一つ橋大通り」と命名しましたが、住民の間では、24 間道路とか 30 間道路と呼んでいました。昭和 34（1957）年頃の案内図から、「大学通り」が見られるようになりました。両端の緑地帯はプリンスホテルの所有地で、歩道部分は市有地です。

当初は京王電気軌道（現・京王電鉄）の電車が、路面の中央を通る予定でした。府中駅で分岐して現在の谷保駅付近から北上する軌道の敷設免許も取得していました。（*50 たまらび Vol67, 今尾恵介, 新旧地形図でみる多摩の道より）

新東京百景、新東京街路樹百景などにも選ばれています。

桜並木は、昭和 8（1983）年皇太子の誕生を祝って昭和 9 年から 10 年にかけて両側に植えたものです。

2) 富士見通り

大学町造成時につくられた。国立駅前から、南西に向かって、中央郵政研修センター前までの約 1300m の道。富士山が真正面に見えます。

3) 旭通り

大学町造成時につくられた、大学通りをはさんで富士見通りの反対側。駅前から南東に向かって国分寺へ続く多喜窪通りと接するまで、約 650m の道。

4) 多喜窪通り

都道 145 号線のうち、旭通りの東 2 丁目交差点から、多摩蘭坂を通って、国分寺駅前へ向かう通りの愛称。元は、多喜窪通りとして、武藏台（府中市）付近から北西に転じて、中央線北側の五日市街道方面へ向かっていました。



図 2-7 大学通り

国立への道は、1931年、箱根土地会社の開発によって造られたものです。
(*62)

2-4 公募で愛称が付けられた通り

昭和57（1982）年公募で次の名称がつけられました。（*26 市報くにたちS57/7/5）

1) 北大通り

北都営住宅東面から国分寺の行政地区まで約670mの通り。ハナミズキの街路樹が続いている

2) 学園通り

郵政研修所南交差点から通称三小通り交差点まで約670mの通りです。

3) さくら通り

昭和40（1965）年富士見台団地が造られると共に出来ました、矢川公園南から富士見台三丁目交差点まで伸びる通りで、長さは1700mです。桜は東端から矢川上公園まで両側に209本、樹齢40年を越える桜のトンネルとなり、市外からも花見客が大勢訪れて、広い通りが混雑するほどの素晴らしいです。

4) 団地通り

富士見台第一団地南から富士見台三丁目交差点まで1690mの通りです。

5) 矢川通り

富士見通りの角、郵政研修所正門交差点から矢川駅に続く通りです。約1170m。江戸街道から矢川駅までの両端に桜が植えられ、さくら通りと交わる二中前交差点は特に見事です。地蔵街道の一部の名前となります

2-5 戦後命名あるいはつくられた道

1) 日野バイパス

谷保の国道20号線国立府中インターチェンジ入口交差点から、国立市南側よりから、石田大橋から、日野市を横断して八王子市高倉町の国道20号高倉町西交差点に至る路線です。2007年3月24日に両側4車線として全線開通しました。2007（平成19）年4月1日日野バイパスが国道20号となり、日野バイパスに並行して走る甲州街道が国道20号から都道2

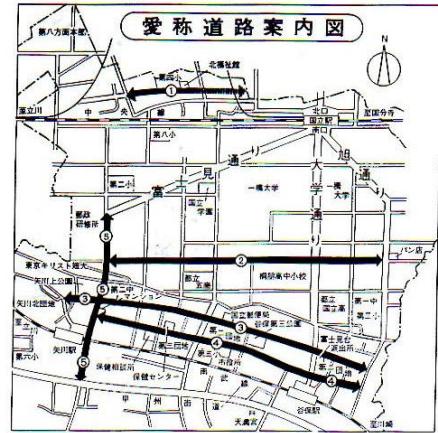


図2-8 道路愛称 市報くにたちより

56号八王子国立線へ移管されました。

2) 中央自動車道

昭和42（1967）年の開通に伴い、南端に国立府中インターチェンジが設けられました。以来ハイウェー時代の到来となりました。

3) みのわ通り（青柳大通り）

矢川緑保全地区北方、立川南通より、甲州街道までの約900mの道。（*39, Vol1.1）、立川飛行場の排水用に人工的に第二次大戦中に造られた緑川を、多摩川への排水路として使用していました。1990年頃から暗渠化し、立川部分をみのわ通り、国立側を青柳大通り（青柳街道）とも呼んでいます。

4) いづみ大通り

甲州街道矢川三丁目交差点より多摩川へむかい、石田大橋北を通り、府中市に至る都営20号線通りの国立市内の愛称です。

5) ブランコ通り

国立駅南口側の多摩信用金庫とせきやビルの間にある小路。スペイン語で白の意。不動産屋が命名したらしい。おしゃれなお店が並び国立の名所となっています。

6) おたか森通り

南武線と、甲州街道の中間にある通りで、西二条通り（一橋大学の西側）と地蔵街道までの地元愛称。地蔵街道近くに「御鷹場」がありました。

7) 多摩川夕焼け通り

多摩川土手沿い道の地元愛称。府中方面から国立泉、青柳にかけての道路。



図2-9 おたか森通り

2-5 その他

1) 国立架橋道（平兵衛新田 拱渠）

中央線ガード東の隧道（トンネル）。国立駅東のガードの東際に煉瓦造りの隧道がありガード完成以前は国立側から北口方面へはこのトンネルを使っていました。（一説には用水用トンネルといもいわれます）

明治44（1991）年7月4日竣工、旧国鉄の台帳では「煉瓦水路」となっています。隧道の幅1.8mアーチ型天頂部高さ2.5m、築造時は全煉瓦造でしたが、昭和3（1928）年の複線化に伴い、南北両端をコンクリートで延長しました。ガード

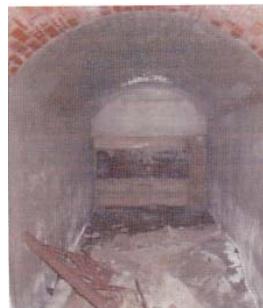


図2-10 国立架橋道

の正式名は「国立架橋道」、ガード幅4.5m、高さ3.15mと昭和29（1954）年12月記載とあります。（*54）

3. 坂

1) 天神坂

谷保天満宮の北側、甲州街道を東から西に下るだらだら坂を「天神坂」といいます。

道路改修以前は、相当の急坂で大八車や馬車など後から手伝って押し上げなければならないほどで、調布の滝坂と並ぶ急坂でした。大正12年、昭和6年から7年にかけて3回の道路整備で、コンクリートで埋め戻し、両端をあげ、なだらかにしました。（図3-1の右上は現在の路面、左下は旧道）
*4・P172、*20-4. Vol25・P245）

2) 仮屋坂（谷保5814先）

建治元（1275）年、天満宮に扁額を奉納するため、勅使が京都から下向した際、仮の宿を設けたところからこのあたりを「かりやうえ」と呼び、南側の甲州街道に出る坂道を「かりやざか（仮家坂）」と呼ぶようになっ

たと言われています。（*48,江戸名所図会）。図2-1 天神坂の坂下と千丑の境目になっています。



図2-1 天神坂の
坂下と千丑の境目
になっています。

3) たまらん坂（東3-8先）

国立旭通りを国立、府中に向かう途中の国分寺市境にあるだらだら坂を「たまらん坂」といいます。あて字で多摩蘭坂と書きます。

大正時代の国立開発の際、国立と国分寺をつなぐ道路をつくるために、段丘を切り開いてできた坂です。

大八車やリヤカーを引く人が、「こんな坂いやだ、たまらん」といったとか、坂の上の宿舎にいた一橋大学の学生が、女子高生の花を摘み取る姿をみて、「もうたまらん、たまらん」と言ったのが仲間の学生間で拡がり、多摩の名と、北大校歌の鈴蘭から蘭をとったという、青春の思い出からの命名の説もあります。（*4・P173,*6,*24-2）



図3-3 多摩蘭坂

2009年5月に亡くなった、ロック歌手忌野清志郎が、近くに住んでいて、「RC サクセション」のヒット曲「多摩蘭坂」のモデルにもなりました。(写真は朝日新聞朝刊 2011年5月7日掲載)

4) しらみ坂 (白明坂) (北1-3)

国分寺崖線に沿って、国立から国分寺の境に、「しらみ坂」の名を残す坂があります。多摩蘭坂から国分寺内藤町 (かつての内藤新田へ抜ける坂と国立市北にある坂が伝えられ、地域により「しらみ坂」の示す所が違うようです。(*6)また府中市の境にも三つめのしらみ坂があります。坂を上がってしばらく行くと、鎌倉街道東部に出ます。また承平7 (1352) 年の府中人見ヶ原の合戦に由来するとの説もあります。(*2 中巻 P653)

神山平左衛門翁が明治18 (1885) 年の「皇国地誌内藤新田戸倉新田の写」に追記した記事では、元弘3 (1333) 年、新田義貞が北条高時の軍と戦ったとき、一度負けた北条軍が分倍河原に陣を退いた際、義貞が闇夜に乘じてこれを追撃しようと、兵を夜行させてこの坂の上まできたが、東の空がしらみはじめてしまい、これが「しらみ坂」の起こりとされています。(*4・P173,*6,猿渡厚『武蔵野物語』)

5) 貝がら坂 (青柳383先)

多摩川日野橋下から続く府中用水取入口のすぐ西方、青柳段丘の立川市境、旧甲州街道を外れるところに、「貝がら坂」とよばれる小坂があります。坂の途中から、貝がらがでることがあるので、この名がつきました。(*4・P173,*6)



図 3-4 貝がら坂

貝はほとんどカキです。『武蔵名勝図会』にも記載されています。古代の貝塚と思われます。

6) 峯坂 (みねっさか)

国立市役所・総合体育館西側から甲州街道にでる途中の坂。(*5)

7) 寺之下坂 (てらのしたさか)

南養寺の南方石田街道の中辺の坂。西方から立川段丘が伸びてきているところで、寺下橋が、府中用水支流上にかかっています。

8) 馬坂 (うまさか)

天神坂中腹から谷保天満宮巖島神社脇に下る小路。仮屋上から勅使が馬で下ったから、または安楽寺住職(宮司兼職)が天満宮に馬で上下したからと言われます。

9) 捨場坂(すてば坂)

国立駅北口から国分寺市役所へ向かう、旧田無道と思われる、国分寺では市役所通りと言われる国分寺崖線を横切る坂。あらゆるものを捨てたので

「捨場坂」と呼ばれたようです。市役所通りは、かつては道幅9尺(2.7m)の土の道で、捨場道とも呼ばれていたようです。(*51・P44)

4. 謝辞

本編については、「国立まなびあるきの会」の方から貴重な情報とアドバイをいただいたことをお礼かた報告します。

5. 関連語句

#34 江戸五街道 【えどごかいどう】

江戸と京都を結ぶ、東海道、中山道、江戸から甲府を経て中山道の下諏訪にいたる甲州海道、江戸と日光を結ぶ日光街道、日光街道から分岐して仙台へ行く奥州街道の5つをいう。慶長年間に整備が開始した。(*42, Vol5, P25)

#35 古道 【こどう】

古代の交通路。旧道と称された。道路は、一般に江戸時代に整備されたものである。(*12, *42, Vol5, P25)

#36 新道 【しんどう】

新たに開いた道。しんどう。(*12)

#37 街道 【かいどう】

各都市間を結ぶ主要道路。江戸時代には、江戸から各地に通じた五街道のほかに、脇往還(わきおうかん)などがあった。海道。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

主に隣村からきて、村内を通り、さらに隣村にたつしているもの。あるいは村を起点として隣村からさらに遠くの村に達するものをいう (*29・P229)

#38 海道 → 街道

#39 往還 おうかん

おうげんとも読む。ゆきかえり、往復をしめす言葉・江戸時代には道路の意味をもいう。五街道およびそれに付属する主要街道を示した。(*13)

#40 道 みち

おもに村内でおよぶ生活道路。何々道と通称される多くのものは、村民が日常生活に利用する道であって、作業道と呼ばれているものである。(*29・P229)

#41 通 とおり

人や車がとおるまちなかの道(*11)

6. 出典・参考資料 ([]内の図書記号は 国立市中央図書館、() は中央公民館)

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7(1995)年 [10/B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 1988~990年 [10/B1]
- 3) 国立歳事記 原田重久 昭和44(1969)年 [10/B1]
- 4) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42(1967)年 [10/B1]
- 5) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50(1975)年 (291)
- 6) くにたち歴史探訪ガイドブック 改訂版 平成16(2004)年 [10/C6]
- 20) 国立の生活誌 国立市文化財調査報告書 国立の暮らしを記録する会編集 [10/D1]

- 1 国立の生活誌 一古老的語る谷保の暮らし (一) 1982年 第14集
- 3 国立の生活誌 一谷保の講中倉と講一 1985年 第17集
- 4 国立の生活誌 古老の語る谷保の暮らし (三) 1988年 第25集
- 24) 武蔵野短編集 たまらん坂 黒井千次 福武書店 1988年 [Y2]
- 2 国立あの頃 国立パイオニア会編 昭和47(1972)年 日本教育出版 [Y3]
 - 多摩蘭坂物語 吉井 韶
- 25) 国立市都市計画マスターplan 2003年 国立市 [S1]
- 26)-1 市制施行10周年記念 市報くにたち 縮刷版1,2 [10/G5]
- 2 市制施行30周年記念 市報くにたち 縮刷版3,4 [10/G5])
- 29)
 - 1 立川の地名一立川編一 保坂芳春 立川市教育委員会 昭和63(1988)年 [28/C3]
 - 2 府中市内旧名調査報告書 道・坂・塚・川・堰・橋の名前 府中郷土博物館 [34C3]
 - 39)健康ウォーキングマップ ウォーキングマップづくりの会 国立市保健センター [10・05]
- 40)-1 府中用水 一移りゆく人と水のかかわり一 くにたち郷土文化館 2001年3月 [K614]
- 41) くにたち郷土文化館 研究紀要
 - 1 くにたちの歴史と文化 渡辺忠胤 No1 1996.4 (K050)
 - 4 くにたちの神社年中行事ー仏教儀礼暦からみた国立市の一年 長沢利明 No5 2003.3(K050)
- 42) 多摩のあゆみ 多摩信用金庫 [A5]
 - Vol 28 多摩川洪水と青柳島の変遷 比留間一郎 Vol28 S57/8
 - Vol 64 地図に読む多摩 明治15年測量地図
 - Vol 94 甲州街道と布田五宿 斎藤司
- 43) 道関係
 - 1 日本交通史概論 大島延次郎 1964年 吉川弘文館 ×
 - 2 大山街道 大山阿夫神社編 1987年 非売品 ×
 - 3 旧鎌倉街道探索の道 「上道編」1973年、「山道編」1988年 さきたま出版会 ×
 - 4 古代日本の交通路 藤岡謙二郎 編 1978年 大明堂 ×
- 48)-2 武蔵名勝図会 植田猛縕 片山迪夫 校訂 慶友社 昭和53(1978)年 [C6]
- 50) 多摩ら・び けやき出版 [02A5]
 - 2011 N067 国立特集 新旧地形図で見る多摩の道 11 今尾恵介
- 51) 北口のあゆみ 国立市北口町会 平成2年
- 52) いしぶみ草紙(路傍の語り部たち) 平成2年初、平成22年改訂、府中市教育委員会
- 53) 川原新田損地御取調べの説の絵図、明治3年、国立市遠藤仁家文書、くにたち郷土文化館蔵)
- 54) くにたちまなびあるき展示会資料 小泉智男 平成24年6月 公民館蔵
- 62) 東京の道事典 吉田立彦他 東京堂出版 2009年 [291]